慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	永嘉四靈の詩學再檢討 : および彼らと江西詩派との關係について (下)
Sub Title	Revisiting Yongjia siling's poetics and their relations to the Jiangxi school (part 2)
Author	錢, 志熙(Qian, Zhixi) 種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Language, culture and communication). No.45 (2013.) ,p.31- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20131231-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

永嘉四靈の詩學再檢討

――および彼らと江西詩派との關係について――
（下）

錢　志熙　著
種村　和史　翻譯

〔譯者凡例〕

○本稿は，北京大學中文系教授錢志熙氏の「永嘉四靈詩學的再探討――兼論其與江西詩派的關係――」（『文學理論研究』2008 年第 2 期）の翻譯である。紙幅の都合上，上下二篇に分けて發表する。

○引用原文には書き下し文もしくは現代語譯を併記した。

○文中の（　）は引用原文および著者による説明を，〔　〕は譯者による補足説明を示す。

○＊1，＊2……は著者による注を，（1）（2）は譯者による補注を示す。

○補注には，引用された文獻を可能な限り原典に當たり詳しい出典情報を補記した。錢氏が據った原典と引用文とを對校し異同が見られた場合，原典によって字句を改めた。唐代の詩人の作品は，『全唐詩』（中華書局排印本），宋代の詩人の作品は『全宋詩』（北京大學出版社。『全』と略稱）に據った。『全唐詩』は，卷數，頁數を算用數字で示した。224–2396 は，卷二二四，2396 頁を表す。『全宋詩』は，卷數，册數，ページ數を算用數字で示した。2815–54–33506 は，卷二八一五，第 54 册，33506 頁を表す。四靈の作品については，著者が『永嘉四靈詩集』（陳增傑校點，兩浙作家文叢，浙江古籍出版社，1985）をテキストとしていることに鑑み，『全宋詩』の他にこのテキストの卷數とページ數を示した。この書は，四靈の詩集ごとに作品を收錄しているが，出典表記は以下のように略稱を用いた。

『芳』（徐照『芳蘭軒詩集』）

『二』（徐璣『二薇亭詩集』）

『葦』（翁卷『葦碧軒集』）

『清』（趙師秀『清苑齋詩集』）

3. 四靈の詩學と江西詩派の詩學との關係

四靈は黄庭堅(1) を，論詩の話頭として常には取り上げてはいないように見える。ただ徐照の『芳蘭軒詩集』の中の五言律詩「淡巖に題す（題淡巖）」に，「却って憐む　黄太史，雁山の中に至らざりしを（却憐黄太史，不至雁山中）(2)」という句が見えるものの，これは論詩のテーマとは關わらない*1。しかし，これまで永嘉四靈の詩學について論じたところからわかるように，彼らの核心的な概念は黄庭堅の詩學ときわめて近い。このことから出發して，從來江西詩派(3) 詩學を否定する者と位置づけられてきた四靈であるが，その詩學はむしろ江西詩派詩學の基本的な内容を一種變化させた形で受け繼いだものであることを考察したい。

まず，唐體・唐律の問題について考えよう。李頎『古今詩話』に次のような記載がある。

『明賢詩話』に次のように言う，「黄庭堅，字は魯直，は放逐された黔南から歸って以後，その詩の實質は以前と變化した。そして，『須く要ず唐律の中に活計を作すべくして，乃ち詩を言ふべし。少陵の淵蓄雲萃，變態百出するを以って，數十百韻と雖も，格律益ます嚴たり。蓋し詩家の法度を操制すること此の如し』とも言った」。私が見るに，黄庭堅の「吳餘干寥明略白露亭燕集詩」などは杜甫にも匹敵するものである。詩は以下のごとくである。

江靜明光燭　　江は靜かにして　光燭　明るく
山空響管絃　　山は空しくして　管絃　響く
風生學士座　　風は學士の座に生じ
雲繞令君筵　　雲は令君の筵を繞る
百粤餘生聚　　百粤　生聚を餘し
三吳喜接連　　三吳　接連を喜ぶ
庖霜刀落鱠　　霜を庖して　刀　鱠を落し
執玉酒明船　　玉を執りて　酒　船に明るし
葉縣飛來舄　　葉縣　飛來の舄
壺公謫處天　　壺公　謫處の天
談多時屢謔　　談は多くして　時に屢しば謔れ
舞短更成妍　　舞は短くして　更に妍を成す

而我孤登覽　　而して我　孤(ひと)り登覽し
觀詩未竟宣　　詩を觀て　未だ竟(つひ)に宣べず
老夫看鏡罷　　老夫　鏡を看ること罷(おは)り
衰白敢爭先　　衰白　敢て先を爭はん

（明賢詩話云，黄魯直自黔南歸，詩變前體。且云，須要唐律中作活計，乃可言詩。以少陵淵蓄雲萃，變態百出，雖數十百韻，格律益嚴。蓋操制詩家法度如此。予觀魯直如吳餘干寥明略白露亭燕集詩，江靜明光燭，山空響管絃。風生學士座，雲繞令君筵。百粤餘生聚，三吳喜接連。庖霜刀落鱠，執玉酒明船。葉縣飛來舄，壺公謫處天。談多時屢謔，舞短更成妍。而我孤登覽，觀詩未究宣。老夫看鏡罷，衰白敢爭先。直可拍肩挽袂矣[*2]）

（◆吳餘干寥明略白露亭燕集詩　『全』996-17-11428 は，詩題を「次韻廖明略同呉明府白雲亭宴集」に作る。以下のように文字の異同がある。◆光燭　『全』，「花竹」に作る。◆座　『全』，「廛」に作る。◆粤　『全』，「越」に作る。◆喜　『全』，「遠」に作る。◆談多時屢謔　『全』，「酌時多暴謔」に作る。◆而　『全』，「唯」に作る。◆未竟　『全』，「未究」に作る。◆老父の句の前　『全』，「空餘五字賞，文似兩京然。醫是肘三折，官當歳九遷」四句有り。）

黄庭堅晩年の創作活動には，確かに唐律回歸の傾向が見られる。これは實は黄庭堅の詩學が詩歌の藝術性追求へ回歸したことの論理的歸結である。慶曆から元祐に至るまでは，古體を尊重し律詩を輕視するという詩體上の觀念が存在しており，黄庭堅自身がそのような觀念を保持していたうちの一人であった。このことを考えると，彼が唐律の詩學的觀點に回歸したのは，きわめて重要な變化である。確かに，黄庭堅は唐律の概念を提起する一方で，古體を尊重する立場も放棄しなかった。この點は，永嘉四靈が古體尊重の立場を全く放棄したのとは異なる。しかし，まさしく黄庭堅こそが，南北宋交代期の唐體・唐律に回歸するという，四靈をその内に含む詩學が發展する趨勢の發端をなしているのである。黄庭堅自身は近體詩の面では七律を主とし，さらに彼が學んだ對象は主として杜甫であったけれども，彼は同時に唐彦謙ら晩唐詩の影響も受けている。彼の七律の風格は，實際には正と變，順と拗，および盛唐と中晩唐の間を折衷したものであった[(4)]。黄庭堅以後，江西詩派の後繼者の作品の重點は實はすでに近體へと轉換し，さらにその優れた作品の多くは五律と七絶という二つの短編の形式となった。永嘉四靈はまさしくこのような趨勢から發展したものである。

四靈詩學の核心は，詩歌の藝術性への回歸にある。それは詩學の面では，「精」という概念として表れている。四靈らの人々は近體を「詩經や離騷の精髄（風騷之至精）」と捉え（先に引用した葉適「徐文淵墓誌銘」に見える(5)），葉適らも唐人の詩學の成果は「近體」にあると認識し，四靈はこのような觀點から唐律に回歸したと指摘している。黄庭堅詩學の基本的立場はまさしく詩歌の藝術性に回歸するというもので，その情性觀，興寄觀および詩學論，いずれもこのような詩歌の藝術性への回歸を主たる精神としている*3。これは，黄庭堅と彼以前の歐陽脩，蘇軾らの大家との最大の相異點である。この點から言えば，四靈詩學はまさしく江西詩派詩學の餘波から發展したものと言うことができる。具體的に言えば，先に述べた，唐體に回歸する意識が黄庭堅から淵源していることの他に，「法」や「苦思」や詩句の吟味精錬などの四靈詩學の核心的な概念は黄庭堅詩學と一定の淵源關係を持つ*4。これは，黄庭堅の詩學が，主脈としては中唐から北宋の古文詩派*5，革新詩派の影響を受け繼いだけれども，その他に相當程度中晩唐の近體詩派の影響を受けていたからである。

後人はその風格や趣向などの面から，四靈詩學の出發點は江西詩派の否定にあると考えている。しかし，四靈の自述や創作の面から推察される淵源を見ると，四靈自身がこのような意見を表明したことはない。反對に，彼らが詩を論じたいくつかの「話頭」から，實際の詩學の傳承の面では，彼らが江西詩派と一定の淵源關係を持っていることがわかる。

四靈はいずれも江西に遊んだことがある。徐照には「信州趙昌父の林居に題す（題信州趙昌父林居）(6)」がある。徐璣には「徐照の先に江西に回(かへ)るを送る（送徐照先回江西）(7)」があり，詩中に「江西　舊友を看，歸計　少しく遲留す（江西看舊友，歸計少遲留）」と言う。翁卷「余伯皋に呈す（呈余伯皋）(8)」は，「我が行　遍(あまね)からんと欲す　江西州，最後　方に作(な)らん　筠陽の客（我行欲遍江西州，最後方作筠陽客）」と言い，彼には他にも「南昌の諸友に留別す（留別南昌諸友）(9)」などの詩がある。趙師秀はかつて筠州（現，江西省高安）推官の職に就いていたことがあり*6，その集中には「筠州郡庠山序(10)」などの詩がある。永嘉四靈の遊歷の範圍は廣くはなく，しばしば旅をした地は江西および兩湖であり，名勝を題詠したり，山水に遊んだことを記したりした作品には，永嘉の他には江西と湖南の二箇所を詠ったものが多い。彼らの集中，朋友と詩のやりとりをした作品で，江西人だとほぼ考證できる相手には，楊萬里(ようばんり)（徐璣「見楊誠齋(11)」），周必大(しゅうひつだい)（「投周益公(12)」），李商叟(りしょうそう)（徐照「題李商叟半村壁(13)」），趙昌父(ちょうしょうほ)〔趙蕃(ちょうはん)，後述〕，楊嘉猷(ようかゆう)(14)，包(ほう)長官（翁卷「送吉水包長官(15)」），張(ちょう)錄事（翁卷「寄筠州張錄事(16)」），沈莊可(しんそうか)（趙師秀「送沈莊可(17)」）*7 等といった人がいる。彼らが詩學上で交遊したのは，永嘉本郡の人以外

は，江西および兩湖の人が多かったと言うことができる。この江西，兩湖の地はまさしく江西詩派の本據地であり，四靈がこれらの地域を旅するのを好んだのは，宦遊や生活のためなどといった實際的な目的の他に，山水に遊び土地の詩人との交流を結ぶのが，主たる目的であったに違いない。

四靈と，江西詩派後期の重要な詩人である趙蕃（章泉）との交流は，とりわけ注意に値する。徐照「信州の趙昌父の林居に題す（題信州趙昌父林居）」に次のように言う。

譜接江西派　　譜は江西派を接ぎて
聲名過浙閒　　聲名　浙閒に過ぐ
棄官從早歲　　官を棄つること早歲從りし
買屋向深山　　屋を買ひて深山に向り
文集通僧借　　文集　僧を通じて借り
漁舟載鶴還　　漁舟　鶴を載せて還る
待予歸舊里　　予の舊里に歸るを待ちて
又得到柴關　　又た得ん　柴關に到るを

趙師秀「章泉趙昌父に敬謝す　二十韻（敬謝章泉趙昌父二十韻）[18]」に次のように言う。

耆舊半凋落　　耆舊　半ばは凋落し
在者如晨星　　在る者は晨星の如し
與翁別豫章　　翁と豫章に別れしより
十見草木青　　十たび草木の青むを見る
人生幾堪別　　人生　幾たびか別るるに堪へん
夢寐生羽翎　　夢寐に羽翎生ず
迢迢玉溪波　　迢迢たり　玉溪の波
近時嘗再經　　近時　嘗て再び經るも
攜家事多難　　家を攜へて　事　難多し
所至那得停　　至る所　那ぞ停まるを得ん
山中空望來　　山中　空しく望み來たり
日夕不掩扃　　日夕　扃を掩ざさず
豈獨負茲約　　豈に獨り茲の約に負かんや

尺書亦沈冥　　尺書（せきしょ）　亦た沈冥（ちんめい）たり
逢人問消息　　人に逢ひて消息を問ひて
但喜言康寧　　但だ喜ぶ　康寧なりと言ふを
墮來兩卷什　　墮（おと）し來たる　兩卷の什
一以慰飄零　　一に以って飄零を慰む
感此故意弘　　此の故意の弘きに感ず
不我迹以形　　我が迹を以って形（あら）はさず
文章出晩歲　　文章　晩歲に出づるも
字畫猶壯齡　　字畫　猶ほ壯齡たり
誦之西湖濱　　之を西湖の濱に誦せば
驚動孤山靈　　驚動す　孤山の靈
翁卷遊崆峒　　翁卷　崆峒に遊び
一已煩郵鈴　　一に已に郵鈴を煩はす
幸翁良未衰　　幸ひに翁　良（まこと）に未だ衰へず
吾黨存典刑　　吾が黨　典刑を存す
遙聞曾入郭　　遙かに聞く　曾て郭に入るは
諒爲韓與丁　　諒（まこと）に韓と丁との爲なりと
郡齋待且久　　郡齋　待つこと且に久しからんとす
幾宿澗上亭　　幾たびか宿す　澗上の亭
今春少晴時　　今春　晴時少なく
澗水應泠泠　　澗水　應に泠泠（れいれい）たるべし
歸來安穩否　　歸りてより來（このかた）　安穩なるや否や
薰風入林坰　　薰風　林坰（りんけい）に入る
願言愛玉骨　　願ひて言はん　玉骨を愛（おし）み
逍遙臥殊庭　　逍遙として　殊庭に臥せよ
會面雖未期　　會面　未だ期せずと雖も
忽聚江湖萍　　忽ち聚らん　江湖の萍

（◆近時　『永嘉四靈詩集』の校語に，もと「近作」に作るが，『宋詩鈔』に據って改めると言う。『全宋詩』は『詩淵』に據って「近昨」に作る。◆『永嘉四靈詩集』の校語に，鄭本・冒本・『宋詩鈔』，「型」に作ると言う。◆郭　『全宋詩』，「郛」に作る。）

趙師秀には「趙昌父に寄す（寄趙昌父）[19]」という作品もある。

逃名逃未得　　名を逃れんとして　逃るること未だ得ず
幾載住章泉　　幾載　章泉に住む
便使重承詔　　便へ使し重ねて詔を承くるも
多應不議邊　　多く應に邊を議せざるべし
高風時所繫　　高風　時に繫がるる所となり
新集世方傳　　新集　世に方に傳はる
憶就江樓別　　憶ふ　江樓に就きて別るるに
雪晴江月圓　　雪　晴れ　江月　圓かなり

彼の集中には，他にも「貴溪に夜泊して趙昌父に寄す（貴溪夜泊寄趙昌父）[20]」という詩があり，その中に「遠く懷ふ　高臥する者，微月　松扉を閉す（遠懷高臥者，微月閉松扉）」の句がある。

さらに徐璣には，また「横碧軒に登りて趙昌父の作に繼ぐ（登横碧軒繼趙昌父作）[21]」の詩があり，また趙師秀の詩中の「翁卷　崆峒に游び，一に已に郵鈴を煩はす（翁卷游崆峒，一已煩郵鈴）」の句から，翁卷もかつて趙蕃を訪問したことがあることがわかる。趙師秀はさらにかつて翁卷に託して文章を傳達させたことがある。

趙蕃〔1143 ～ 1229〕，字は昌父，號は章泉，江西信州（上饒）の人。詩に巧みで，楊萬里と長年の交流があった。また，河南の韓淲と竝び稱せられた。韓淲〔? ～ 1135〕は，字は仲止，號は澗泉，彼もまた上饒に住み，趙蕃と合わせて當時「二泉」と稱せられた。趙師秀の詩中に「遙かに聞く　曾て郭に入るは，諒に韓と丁との爲めなりと（遙聞曾入郭，諒爲韓與丁）」という句があったが，「韓」とは韓淲を指しているようである。韓淲の『澗泉集』卷六に「昌父　徐仙民の詩集に題し因りて兩篇に和韻す（昌父題徐仙民詩集因和韻兩篇）[22]」という詩があるが，「徐仙民」とはすなわち徐照のことである。徐照はまた山民とも號したが，當時はあるいはまた「仙民」とも號したのであろう。この詩に，「眇眇として　三靈　見え，蕭蕭として　一葉　知る（眇眇三靈見，蕭蕭一葉知）」と言う。「三靈」とは徐照，一の字は靈暉以外のその他の三名を指し，「一葉」とは葉適を指す。韓の詩から趙蕃はかつて徐照の詩集のために詩を題したことがあったとわかる。

さらに翁卷に「南澗に韓仲止を尋ねて遇はず（南澗尋韓仲止不遇）[23]」の詩があり，次のように言う。

樹樹有佳色　　樹樹　佳色有り
山蟬不住吟　　山蟬　吟ずるを住(や)めず
掬來南澗水　　南澗の水を掬(く)み來れば
清若主人心　　清なること主人の心の若し
屋上雲飛冷　　屋上　雲　飛ぶこと冷たく
籬根蘚積深　　籬根　蘚　積もること深し
留詩在巖壁　　詩を留めて巖壁に在り
明日更相尋　　明日　更に相尋ねん

趙師秀には，「韓仲止を訪ねて遇はず，澗上に題す（訪韓仲止不遇，題澗上）[24]」の詩があり，次のように言う。

隔澗竹扉深　　澗を隔てて竹扉　深く
蒼童引客尋　　蒼童　客の尋ぬるを引く
雖然乖晤語　　晤語に乖(そむ)くと雖然(いへど)も
猶得見園林　　猶ほ園林を見るを得たり
野蔓時妨步　　野蔓　時に步を妨げ
山蟬亦好吟　　山蟬　亦た好く吟ず
石根泉數斗　　石根　泉　數斗
清冷應人心　　清冷　人心に應(こた)ふ

二人の詩から，韓淲の清逸な人品と詩風に對して深い敬慕の念を抱いている様子が窺われる。二泉はともに江西詩派を傳承した人物で，趙蕃には江西詩派を論じた文章が大變多い。例えば『淳熙稿』卷一「宋柳州綬を挽す（挽宋柳州綬）[25]」に次のように言う。

少陵在大曆　　少陵は大曆に在り
涪翁在元祐　　涪翁(ふうおう)は元祐に在り
相去幾百載　　相去ること幾百載
合若出一手　　合ふこと一手より出づるが若し
流傳到徐洪　　流傳して徐洪に到り
繼起鳴江右　　繼起して　江右に鳴る

遂令風雅作　　遂に風雅をして作(おこ)ら令めて
千古無遺究　　千古　遺究無し
（◆少陵　杜甫の號。◆涪翁　黄庭堅の號。◆徐洪　江西派の詩人で，ともに黄庭堅の親族である徐俯(じょふ)，1075 ～ 1141，と洪炎(こうえん)，1067 ～ 1133 のこと。◆無遺究　『全宋詩』，「亡遺究」に作る。）

また，「詩を論じて碩父に寄す（論詩寄碩父）[26]」に次のように言う。

東萊老先生　　東萊　老先生
曾作江西派　　曾て江西派と作(な)る
平生論活法　　平生　活法を論じ
到底無窒礙　　到底　窒礙(ちつがい)無し
（◆東萊　呂本中，1084 ～ 1145，のこと。「江西詩社宗派圖」を作った。）

「二泉」は四靈と同時期で，詩壇における世代的な序列は四靈の上である。上に述べたような四靈と趙蕃との交流から考えて，彼らが詩學の上で「二泉」と交流があったことがわかる。さらに，趙師秀の「幸ひにも翁　良(まこと)に未だ衰へず，我が黨　典型を存す」や「高風　時に繫ぐ所となり，新集　世に方に傳はる」の句から，四靈が章泉を詩學の上での先輩であり典範であると尊敬していたことがわかる。これは，四靈と江西詩派のもっとも直接的な關係を表す例である。

「二泉」の他に，四靈は楊萬里ともかつて交流があった。徐璣「楊誠齋に見ゆ（見楊誠齋[27]）」に次のように言う。

名高身又貴　　名は高く　身も又た貴く
自住小村深　　自ら住まふ　小村の深きに
清得門如水　　清なることは得る　門の水の如きを
貧惟帶有金　　貧なることは惟だ帶に金有るのみ
養生非藥餌　　養生　藥餌に非ず
常語盡規箴　　常語　盡く規箴
四海爲儒者　　四海　儒者と爲りて
相逢問信音　　相逢ふて　信音を問わん

また，徐照「路に楊嘉猷の官に嚴州に赴くを訪ぬ（路訪楊嘉猷赴官嚴州）[28]」に次のように言う。

詩合誠齋意　　詩は誠齋の意に合ひ
難將片石鐫　　片石を將(も)って鐫(うが)つこと難し
相逢因在道　　相逢ふは道に在るに因り
惜別未移船　　別れを惜しみて未だ船を移らず
野步僧同話　　野步　僧　話を同じくし
宵吟吏廢眠　　宵吟　吏　眠りを廢す
思君還有夢　　君を思へば　還(ま)た夢有り
前到釣臺邊　　前に到る　釣臺の邊

楊萬里は，江西詩派から出て變化させるところがあった。その詩法は景物を捜覽し，活法によって寫生することを重視するものである。一方，永嘉四靈の詩作の最大の特徴は，山澤の閒に詩材を捜し求め，景物の形象を磨き拔いた言葉で表現するところにある。楊萬里の詩法とは遲速の違いこそあるけれども，景物の寫生を重んじるという一點においては，まさしく楊萬里らの影響を受けている。しかも，楊萬里は江西詩派に出自を持ちつつそれを變化させた詩學的傾向を持っている。このことは，四靈に對して啓發を與えたに違いない。

4. 四靈のグループとしての性格と審美的理想

四靈はグループとしての性格上，寒門の階層に屬する。徐照は生涯仕えることがなく，徐璣，翁卷，趙師秀の三人は仕途に就いた經驗はあるものの，終始，州縣の役人レベルで浮き沈みしていて，古人のいわゆる「下僚」，すなわち現在言うところの下層官吏に屬していた。筆者は，「試論四靈詩風與宋代温州地域文化的關係[29]」という文章の中で，兩宋時期の温州が傳統的士大夫階層と文化にとって新興の地であったことを指摘した。四靈に結實する兩宋時期の温州地域の詩風は，まさしくこのような士大夫文化の發展の成果である。士大夫階層の膨大化は兩宋時期の普遍的な特徴であるが，膨大化の結果として，その内部にさらなる階層の差異と分化とが引き起こされた。仕途に就くすべを持たなかったり，あるいは長期にわたり下僚の地位に沈淪する一群の士人が出現し，彼らと高位に出世した

官僚階層との間には，在朝派と在野派という差異が明らかに見られるようになった。士大夫官僚および官僚政治と対比させるならば，これは大量の士人が周縁化したものと言うことができる。いわゆる江湖詩派は，こうして生まれたのである[*8]。

周縁の位置に追いやられた江湖士大夫グループにとっては，周縁化そのものは受動的な作用の結果であるが，このような周縁化が起こったことを事實として意識した時，周縁の位置にある者は往々にして自分自身のアイデンティティを追求しようとするようになる。四靈と江湖詩派は，兩宋士大夫の主流である政治と思想（道術と道學）という核心的な話題から自ら一歩身を引こうとした。そして，江湖に生きる人間という役割とそれにふさわしい意識と話題を強調した。もちろん四靈と戴復古のような詩人は，なお時事に關心を寄せ，時には情熱的と言っていいほどの態度を示すことすらあり，このことについては從來の研究者もみな指摘している。しかし，詩歌の主題ということから見ると，このような關心はおおむね兩宋期の現實に對する關心，とりわけ南宋前期の敵に對抗し時勢を憂うというテーマが自然に遺傳したものであり，江湖詩派獨自の特徴を持った核心的なテーマとなっていたわけではない。

永嘉四靈に關して言えば，經濟的，政治的に，貧困で身分の低い境遇を變えるのが困難であり，思想的領域においても學術の中心に參加することさえできないという状況の下で，自覺的に隱逸者として，庶民の中に埋もれて生活する者として自らを持し，終生怠らず追求すべき價値ある體系として詩歌藝術を捉えたのである。彼らの苦吟を旨とする詩學は，その社會的地位と緊密に結びついている。彼らにとっては，詩歌それ自體がそれ以外の重要な政治的思想的テーマに取って代わるものであった。だから，彼らの詩の中で，詩それ自體が最も重要なテーマとなったのである。詩は，人生を支え，貧困で身分の低い境遇がもたらす苦難を超越するための，主たる精神的な原動力となった。彼らは，貧困に耐えることが詩歌藝術を追究するために必ず拂わなければならない代價であるという信念を形成しさえもした。

君早抱奇質　　君は早（つと）に奇質を抱き
獲與有道親　　有道と親しきを獲たり
微官漫不遇　　微官　漫（みだ）りに遇はず
泊然安賤貧　　泊然（はくぜん）として賤貧に安んず
心夷語自秀　　心は夷（たい）らかにして語は自ら秀で
一洗世士陳　　一たび世士の陳なるを洗へり

使其養以年　　使(も)し其れをして養ふに年を以ってすれば
鮑謝焉足鄰　　鮑謝　焉んぞ鄰なるに足らんや
（◆鮑謝　鮑照と謝靈運。）

（趙師秀「徐璣を哭す（哭徐璣）[30]」）

遊宦歸來隔幾春　　宦に遊び歸り來りて　幾春を隔つ
清羸還是舊時身　　清羸(せいるい)　還(ま)た是れ舊時の身なり
養成心性方能靜　　心性を養ふこと成りて　方に能く靜なり
化得妻兒不說貧　　妻兒を化し得て　貧を說かず
竹長新陰深似洞　　竹は新陰を長ぜしめて　洞より深く
梅添怪相老於人　　梅は怪相を添へて人より老いたり
亦知曾見高人了　　亦た知る　曾て高人に見(まみ)え了(おは)るを
近作文章氣習勻　　近く文章を作りて　氣習　勻(ととの)ふ

（徐璣「趙師秀に贈る（贈趙師秀）[31]」）

上天如有意　　上天　意有るが如く
此地着詩人　　此の地　詩人を着かしむ
吟得物俱盡　　吟は得たり　物　俱に盡くすを
罰令生世貧　　罰は生世をして貧なら令む

（徐照「羅隱の故居に題す（題羅隱古居）[32]」）

貧與詩相涉　　貧と詩とは相涉る
詩清不怨貧　　詩　清ければ　貧なるを怨まず

（徐照「潘得久の徐文淵・趙紫芝の里に還るを喜ぶに和す（和潘得久喜徐文淵趙紫芝還里）[33]」）

悟得玄虛理　　悟り得たり　玄虛の理
能令句律精　　能く句律をして精なら令む
生前惟瘦苦　　生前　惟だ瘦苦
身後得名清　　身後　名の清きを得たり

（徐璣「徐道暉の集を讀む（讀徐道暉集）[34]」）

ここに現れている文學的思想の源流は，もちろん「窮して後工なり」〔歐陽脩「梅聖俞詩集序」「梅聖俞墓誌銘」などに見える語〕であり，これは寒門の作家の文學を精神的に支える基本的な認識となっていた。しかし，四靈以前の寒門の詩人の多くは，自分が本來與えられるべき境遇を與えられていないと言い募り，不平不滿や恨み辛みを詩作上の趣向とした。四靈はこれとは異なり，不平不滿を言い募る傳統的な觀念を努めて棄て去ろうとしている。もちろん彼らの詩には貧しさ故の苦勞が多く描かれているが，しかし不平の語氣を表出することを極力戒め，詩は穩やかで和やかなものであるべきと主張した。

楚辭休要學　　楚辭　學ぶを要めんことを休めよ
易得怨傷和　　怨みて和を傷むるを得易し
（翁卷「蔣德瞻節推を送る（送蔣德瞻節推）」[35]）

莫因饒楚思　　楚思　饒きに因りて
詞體失和平　　詞體　和平を失ふこと莫かれ
（趙師秀「徐璣の永州掾に赴くを送る（送徐璣赴永州掾）[36]」）

四靈のこのような審美的觀念は，やはり宋學の精神に根ざしたものである。梅堯臣から黃庭堅に至るまで，いずれも穩やかで含蓄に富んだ美を尊ぶ審美的意識を有していた。特に黃庭堅は性情をもって詩を作り，道に合致して怨むことがないという精神を提唱した。彼のこの方面の理論は，主として「王知載の『祐眴山雜詠』の後に書す（書王知載祐眴山雜詠後）[37]」「晁元忠に答ふるの書（答晁元忠書）[38]」などの文章のなかに見えていて，また彼の實踐的行動の上にも充分に體現されている。四靈は，『楚辭』が過度に怨み激情に驅られていると見なしたが，これは黃庭堅の思想とも非常に近い*9。徐照「翁誠之を哭す（哭翁誠之）」に，「詩の情性を識るに因りて（因識詩情性）[39]」と言うが，情性についてのこの基本的な主張は黃庭堅の詩學と一脈相通じるものである。もちろん，四靈は黃庭堅の詩學思想を直接受容していたわけではないかもしれないが，しかし，黃庭堅の詩學思想は江西詩派による解説と稱揚とを通して，實際にはすでに兩宋交代期の詩學の基本的思想となっていた。この面を見ると，四靈詩學およびその後繼である江湖詩派の詩學が，江西詩派詩學の單純な否定ではないことがますます理解できる。兩者の間は實際には學的展開の關係が存在するのである。

實際にはグループとしての特徵から考えると，四靈と後期江西詩派は近しい關係にある。

その上，宋代の詩人グループの展開から考えると，四靈および江湖詩派はまさしく江西詩派を受け繼いで現れたものである。元祐黨禁の後，當時の江西詩派を含む元祐文學と學術の繼承者たちは，相當程度周縁化し，在野化していた。呉坰（ごけい）『五總志*10』は，元祐以降の蘇黄詩學の分流の情況を論じて，「蘇軾を師とする者は浙右に集まり，黄庭堅を師とする者は江右に集まった（師坡者萃於浙右，師谷者萃於江右）」と述べている。このような情況はまさに詩歌の中心が在朝から在野に轉換していることを示しており，まさしく永嘉四靈と江湖派の地域化，在野化の先觸れとなっている。

江西派詩人は，その開祖黄庭堅こそ學術文藝の世界で多方面にわたる成果を殘したけれども，彼以外の二陳（陳師道・陳與義[40]）以下の人々は次第に純粹な詩人としての傾向を強くしていった。後期江西派の詩歌はその精神がますます内面化，單純化しており，中唐から元祐に至る古文詩派の殘した，膨大な現實の重荷と思想文化の蓄積から完全に超脱している。これが宋代の詩人集團の主體の轉換をもたらした。すなわち慶曆年間から元祐年間に至るまでは，詩人集團の成員は在朝の官僚が占めていたけれども，これ以後は在野の人間が主體となっていったのである。この點を見るだけでも，江西派から四靈，江湖派への流れは，詩人集團の性質において繼承關係にあることがわかる。江西派の末流が在野の詩學を開拓し，四靈と江湖派がそれに變化を加えたのである。兩者の間は單純な否定關係では捉えられない。

四靈は詩人としての修養と詩歌の審美的な趣味の面では，いっそうの單純化と内面化を示している。彼らは，人格心性の修養と詩歌の審美的趣味との間に直接的な對應關係を求めようとした。修養が直接文藝の目的となった。すなわち，詩人は優れた詩を作り，優れた句を吟ずることによってその心を修養する工夫をしていると考えられた。趙師秀の「ただ梅の花を數斗食らい，胸の内を清らかに透き通らせたならば，自然と詩が作れるようになる（但飽喫梅花數斗，胸次玲瓏，自能作詩）[41]」という戯れの言葉は，實は四靈派の詩人の修養に關する考え方をイメージとして表現し得ている。彼らの修養論は社會的内容および一般的儒學道德的内容（歐陽脩の「道」，黄庭堅の「經史根底」のごとき）から離脱し，柔軟に禪と道から一部の要素を吸收しており，一般的な宋學の修養論と比べると，實から虚への轉化が見られる。

掩關人迹外　　關を掩ふ　人迹の外
得句佛香中　　句を得　佛香の中
鶴睡應無夢　　鶴　睡りて　應に夢無かるべし

僧談必悟空　　僧　談じて　必ず空を悟らん

（徐照「宿寺」[42]）

詩因緣解堪呈佛　　詩は緣に因りて解して　佛に呈するに堪へ
棋與禪同可悟人　　棋は禪と同じくして　人を悟らしむべし

（同「從善上人に贈る（贈從善上人）」[43]）

近參圓覺境如何　　近ごろ圓覺に參じて　境は如何
月冷高空影在波　　月　高空に冷ややかにして　影は波に在り
身健卻緣餐飯少　　身　健やかなるは　卻って　飯を餐すること少なきに緣（よ）り
詩情都爲飲茶多　　詩　清らかなるは　都（すべ）て　茶を飲むこと多きが爲めなり
城居亦似山中靜　　城居　亦た似る　山中の靜かなるに
夜夢俱無世慮魔　　夜夢　俱に無し　世慮の魔
昨日曾知到門外　　昨日　曾て知れり　門外に到り
因隨鶴步踏青莎　　因りて鶴の步むに隨ひて　青莎を踏みしを

（◆詩情　原文に錢氏注して「按ずるに『淸』に作るべきである」と言うのに從い訓讀した。なお，『全宋詩』も「詩淸」に作る。）

（徐璣「徐照に贈る（贈徐照）[44]」）

詩因道進言辭別　　詩は道に因りて進み　言辭　別なるあり
丹得師傳火候眞　　丹は師を得て傳へられ　火候　眞なり

（翁卷「陳管轄に贈る（贈陳管轄）[45]」）

兩宋交代期，詩禪論が流行した。江西學派は禪や道敎の言葉を借りて詩を論ずることが多かった。曾季貍（そうきり）『艇齋詩話』に次のように言う。

陳師道は詩を論じて「換骨」を唱え，徐俯[46]は「中的」を唱え，呂本中[47]は「活法」を唱え，韓駒[48]は「飽參」を唱えた。それぞれ視點は異なっているが，實はみな同じ道理であり，つまりは悟りの境地に達しなければだめだということを理解するのが肝要なのである（後山論詩說換骨，東湖論詩說中的，東萊論詩說活法，子蒼論詩說飽參，入處雖不同，然其實皆一關捩，要知非悟入不可）*11

上述した，四靈と關係のある趙蕃は，呉可（ごか），字は思道と龔相（きょうそう），字は聖任の「學詩詩」の「詩を學ぶは渾（すべ）て似る　參禪を學ぶに（學詩渾似學參禪）*12」の論をさらに受け繼いだ。四靈が詩禪相關するという説を愛好したことは，まさしく江西詩派の末尾を受け繼いだものである。しかし彼らはさらに空ろで靜かな心性の修養を目指した。彼らが禪を學んだのは，完全に詩を作るための心的地盤を修養するためであった。このように審美的に修養を追求したのは，世俗の事柄から超脱する境地に達し，「清」らかな詩歌を創造せんがためであった。

愁與詩相似　　愁は詩と相似たり
能令鬢髮新　　能く鬢髮をして新なら令む
意清塵不沒　　意は清けれども　塵は沒せず
道直事多屯　　道は直なれども　事は屯多し

（徐照「愁」(49)）

扁舟莫負林閒約　　扁舟　負（そむ）く莫かれ　林閒の約
好把清詩慰此心　　好し清詩を把（と）りて　此の心を慰めよ

（同「翁常之に酬ゆ（酬翁常之）」(50)）

畫要天機到　　畫は要（もと）む　天機の到れるを
常人學不成　　常人　學びて成らず
胸中無世事　　胸中に世事無く
筆下有詩情　　筆下に詩情有り

（同「鄧叔珍の畫を求む（求鄧叔珍畫）」(51)）

逐時看景異　　逐時　景を看れば異たり
風物入詩清　　風物　詩に入りて清らかなり

（同「淨光山四詠　水心先生に呈す（淨光山四詠呈水心先生）」(52)）

幽人愛秋色　　幽人　秋色を愛するは
只爲屬吟情　　只だ吟情を屬（つづ）らんが爲なり
一片葉初落　　一片　葉　初めて落ちて

數聯詩已清　　數聯　詩　已に清し

（趙紫芝「秋色」[53]）

これらからわかるように，「清」とは四靈が詩を論ずるとき常に取り上げる話頭であった。四靈の「清」は，一般的な風格上の意味から言う「清」とは異なり，詩の境地自體が清らかであることを指している。彼らにあっては，清はきわめて單純な審美的概念であり，それは直接詩の境地自體に宿る。徐璣「秋行」[54] に次のように言う。

詩懷自歎多塵土　　詩懷　自ら歎く　塵土多きを
不似秋來木葉疏　　似ず　秋來　木葉　疏なるに

この詩は，彼らが創作活動の中で「清」なることに執着し，それはほとんど形而上學的追求といってよいものであったということを，反面的に説明している。實際には，「清」とは宋代の寒門詩人たる彼らの趣味を明確に體現したもので，それはまさしく周縁化に追い込まれた士大夫たちが自覺的に追求した審美的意識であったのである。

「清」と關連した「寒」とか「瘦」なども同様の趣味を體現したものである。徐璣「徐道暉の集を讀む」[55] に次のように言う。

生前唯瘦苦　　生前　唯だ瘦苦
身後得名清　　身後　名の清らかなるを得たり

趙師秀「葉司理に答ふ（答葉司理）[56]」に次のように言う。

喜看君字畫　　看るを喜ぶ　君の字畫
癯似我形骸　　癯（や）せたること我が形骸の似（ごと）し

同じく「劉隱君山居[57]」に次のように言う。

慮淡頭無白　　慮は淡にして　頭に白きもの無く
詩清貌不肥　　詩は清にして　貌は肥えず

これらの詩から，「清」の他に，「寒」「瘦」もまた四靈詩歌の審美的趣味として追求した基本的なものであったことがわかる。

＊＊＊　＊＊＊

以上述べたことからわかるように，永嘉四靈の詩學には確かに理論的な説明も批評的著述も缺けているが，しかし，彼らには完全な概念の體系と「話頭」とがあった。加えて，これらの概念と「話頭」は，彼らの創作の實踐における規範と展開に對して非常に重要な作用を擔っていた。そしてそれは彼らが詩歌史，詩學史に參入していくための重要な入り口でもあった。このことから傳統的詩學の存在形態を窺い知ることができる。その他に本稿で提起した，四靈，江湖詩派と江西詩派との關係は，宋詩の主たる流れがいかに發展していったかを考察するために，新しい視點を與えるものである。紙幅と本稿の主題との關係によって，この問題についてはここでは充分に展開することができなかった。今後さらなる研究に待ちたい。

注

＊1　淡巖は湖南永州にある。『山谷內集』に「題淡山巖二首」がある。徐照は淡巖に遊び黃庭堅の詩を見，彼が永嘉の山水を遊覽することができなかったことを嘆いている。もし遊覽できていたら，永嘉のこの上もなく清らかな風景を見て，黃庭堅は必ずやすばらしい詩を作っていたに違いないと言うのである。

＊2　郭紹虞『宋詩話輯佚』卷上『古今詩話』（中華書局，1980，266 頁）。
譯者注記――原文では，末尾「直可拍肩挽袂矣」一句は引かれていないが，譯出に當たり理解の便宜を考えて補った。

＊3　錢志熙『黃庭堅詩學體系研究』第貳・叁部分（北京大學出版社，2003）を參照のこと。

＊4　『黃庭堅詩學體系』第伍・陸部分の詩法・詩律・苦思・鍛錬等の問題についての論述を參照のこと。

＊5　「古文詩派」という概念は，梁昆『宋詩體派論』に出づる（商務印書館，1939）。

＊6　『永嘉縣志』趙師秀本傳。

＊7　戴復古『石屏詩集』に「寄沈莊可」「沈莊可自號菊山人」二詩がある。『正德袁州府志』卷七「科第」に，「沈莊可，號菊山，孝宗時进士，分宜（現，江西省分宜）人」と言う。ここには，あわせて朱熹が沈莊可を追悼して作った詩を載せる。ここから莊可が當時，名ある詩人であったことがわかる。

＊8　張宏生『江湖詩派研究』（中華書局，1995）は永嘉四靈を内に含む江湖詩派の社會的要素，文化

的屬性についてかなり深い分析を行っている。その第一・二章を參照のこと。

＊9　黄庭堅の性情をもって詩を爲(つく)る，道に合して怨まず，および楚辭は怨むこと甚だしいと論じた詩學思想については，錢志熙『黄庭堅詩學體系研究』の關連する論述を參照のこと。

＊10 知不足齋叢書本『五總志』。

＊11 曾季貍『艇齋詩話』(『歷代詩話續編』本，中華書局，1983，296 頁)。

＊12 魏慶之『詩人玉屑』卷一「趙章泉學詩」條（王仲聞校點本，上海古籍出版社，1978，〔上册 10 頁〕)。

譯者補注――呉可（宣和年間の詩人）と龔相（神宗朝から徽宗朝の官僚であった龔原の孫）の二人の詩人が相繼いで「學詩渾似學參禪」の句に始まる三首連作の詩を作ったのに，趙蕃は倣って同じく三首連作の詩を作ったことが，『詩人玉屑』卷一に，「趙章泉學詩」「呉思道學詩」「龔聖任學詩」の三條に紹介されている。

補注

(1)　黄庭堅（1045 ～ 1105)，字は魯直，號は山谷。分寧（江西省修水）の人。蘇軾の門人であり，蘇軾とともに北宋を代表する詩人とされる。杜甫を崇敬し，「換骨奪胎」「點鐵成金」などを主張し，典故を重視し，修辭を追求する古典主義的な詩風を開拓した。江西派の開祖とされる。

(2)　『芳』上，32 ／『全』2670–50–31373。

(3)　北宋末から南宋にかけて大きな影響力を持った詩派。杜甫を最高の詩人と仰ぎ，黄庭堅，陳師道などを模範として，典故を重視する詩風を標榜した。

(4)　錢志熙『黄庭堅詩學體系研究』第玖部分を參照のこと。

(5)　本譯稿上篇（『言語・文化・コミュニケーション』第 44 號，2012，44 頁）參照。

(6)　『芳』上，28 ／『全』2670–50–31371。

(7)　『二』上，107 ／『全』2777–53–32863。

(8)　『葦』，166 ／『全』2673–50–31408。

(9)　『葦』，199 ／『全』2673–50–31423。

(10)『淸』，228 ／『全』2841–54–33838。

(11)『二』上，111 ／『全』2777–53–32865。楊萬里（1127 ～ 1206)，字は廷秀，號は誠齋。吉水 (江西省）の人。陸游・范成大とともに南宋を代表する詩人。

(12)『二』上，111 ／『全』2777–53–32865。周必大（1126 ～ 1204)，字は子充，一の字を洪道，省齋居士と號す。廬陵（現，江西省）の人。政治家としては宰相の地位に登ると同時に，詩人としても名高かった。

(13)『芳』上，28 ／『全』2670–50–31371。李商叟（生卒年不詳)，臨川（江西省）の人。曾幾（1084 ～ 1166）に學び，趙蕃と交流があった。

(14) 後出の徐照「路に楊嘉猷の官に嚴州に赴くを訪ぬ（路訪楊嘉猷赴官嚴州)」（補注（28)）參照。楊嘉猷。傳不詳。

(15)『葦』、194 ／『全』2673–50–31421。「吉水」は現，江西省。

(16)『葦』，201 ／『全』2673–50–31424。
(17)『清』，232 ／『全』2841–54–33841。
(18)『清』，221 ／『全』2841–54–33835。
(19)『清』，229 ／『全』2841–54–33839。
(20)『清』，251 ／『全』2841–54–33850。
(21)『二』上，111 ／『全』2777–53–32865。
(22)『全』2759–52–32545。
(23)『葦』，197 ／『全』2673–50–31422。
(24)『清』，251 ／『全』2841–54–33851。
(25)『全』2618–49–30417。
(26)『全』2621–49–30475。
(27) 補注（11）參照。
(28)『芳』上，28 ／『全』2670–50–31371。
(29) 錢志熙「試論＜四靈＞詩風與宋代温州地域文化的關係」(『文學遺産』，2007 年第 2 期)。拙譯は，「『四靈』の詩風と宋代温州地域文化との關係について」(『江湖派研究』第 2 輯，江湖派研究會，2012)。
(30) 五首の第一首。『清』，223 ／『全』2841–54–33836。
(31)『二』下，144 ／『全』2778–53–32882。
(32)『芳』上，8 ／『全』2670–50–31361。
(33)『芳』上，20 ／『全』2670–50–31367。
(34)『二』上，130 ／『全』2777–53–32874。
(35)『葦』，185 ／2673–50–31417。
(36)『清』，234 ／『全』2841–54–33841。
(37) 黄庭堅『豫章黄先生文集』卷二六（四部叢刊正編 49)。
(38) 同上卷十九。
(39) 二首の第一首。『芳』中，43 ／『全』2671–50–31380。
(40) 陳師道（1053 ～ 1102)，字は履常，無忌，後山居士と號す。蘇軾の門人で，黄庭堅とともに江西派の模範たる詩人として尊崇された。陳與義（1090 ～ 1139)，字は去非，號は簡齋。江西派の代表的詩人であるが，靖康の變による流浪を經て，沈鬱な敍情性に滿ちた詩風へと轉換した。
(41) 元・韋居安『梅磵詩話』。
(42)『芳』上，6 ／『全』2670–50–31360。
(43)『芳』上，11 ／『全』2670–50–31363。
(44)『二』下，144 ／『全』2778–53–32882。
(45)『葦』，201 ／『全』2673–50–31424。
(46) 徐俯（1075 ～ 1141)，字は師川，江西派の詩人。
(47) 呂本中（1084 ～ 1145)，字は居仁，東萊先生と呼ばれた。江西詩派を繼承し，「江西詩社宗派圖」を著した。
(48) 韓駒（? ～ 1135)，字は子蒼。江西派の詩人。
(49)『芳』上，9 ／『全』2670–50–31361。

(50)『芳』上，11／『全』2670–50–31362。
(51)『芳』上，37／『全』2670–50–31376。
(52) 四首の「會景軒」。『芳』中，54／『全』2671–50–31385。
(53)『清』，230／『全』2841–54–33840。
(54) 二首の第二首。『二』下，150／『全』2778–53–32885。
(55) 補注（18）參照。
(56)『清』，241／『全』2841–54–33845。
(57)『清』，242／『全』2841–54–33845。

本飜譯は、日本學術振興會、平成 25 年度科學研究費基盤（B)「南宋江湖派の總合的研究」による研究の成果の一部である。